

三原正家の井戸

館長 富岡 敬之

この3月10日をもって、テーマ展「備中刀工・国重派」を終了した。これはかつて昭和52年にテーマ展「備前の釉陶 — 閑谷焼, 虫明焼, 宇野津焼 —」を企画したのと同じ発想である。というのは、一般に備前の焼物といえば、釉薬を用いないことで有名な備前焼（伊部焼）だけがクローズ・アップされてしまい、他に焼物はなかったかのような感じになってしまう。そこで埋もれた方を紹介してみようということになったものである。今回もまた同様に、本県の刀といえば備前長船だけに限らぬことを示そうとした企画であった。いさか天の邪鬼的な発想といえないこともないが、『岡山県の歴史と文化』を展示、紹介することを使命とするわが館としては、いわゆる名産でないものの解明もつねに念頭に置いて活動しなければならぬと考えている。

ところで、この「備中刀工・国重派」展開催中、私はサンケイ新聞から『話のロータリー』欄に寄稿を依頼された。例によってネタ探しに苦しみ、その結果、折よくやっていた上記テーマ展の紹介を、随筆風にやることで責めを果たすことにした。題して『志士と愛刀』— 常人にはとてもものに理解できないような振幅の大きさから、現在に至ってもなお、毀誉相半ばしている幕末の志士、清河八郎の愛刀が備中刀であったことを述べ、きびしい時代に生きるための護身用として、見てくれよりも何よりも備中刀の持つ実用性を八郎が重視したのではなかったかということ、いかにも尤もらしく論じた(?) ような次第である。

しかし、これにはいくらか、さもない料簡も含まれていた。それは、拙文によって備中刀に興味を誘われ、冬枯れのわが館を訪ずれる人々の2、3人位は期待できるのではなかろうかとの計算だったが、編集子はいちはやくこの陰謀を察知したらしく、掲載されたのはナント、テーマ展終了日まであと8日を余すのみの3月2日の紙上であった。

これでは千客万来を期待できるわけがない。広告宣伝費をケチった報いがこれかと、先立たぬものは何も金ばかりではないわいと、後悔の膺をかんで、翌3日

付けて、T氏という広島県三原市在住の未知の方からのハガキが来た。

それによれば、拙文中に触れた備後三原の刀工、三原正家の使用した井戸が、「刀工の井戸」として、三原市糸崎町の三菱病院南側に現存すること、そしてそれは現在三菱重工傘下の東中国菱重興産株式会社によって管理されていること、などが報ぜられていた。

なお、これには追伸があって、T氏が三菱重工におられた頃、将来心ない土建業者等によって、この井戸が不用意に埋没されることを防止するため、傘下の会社責任者に申し入れて、掲示をして保全に注意することにされた由である。

刀剣に関して専門外の私には、この井戸がどのような考証を経て、南北朝時代に活躍した刀工三原正家の井戸と確定されたものか、その経緯については未詳である。ただ、私は、私たち月給をもらって文化財保護をやっている人間ならばともかく、日本の、いや世界の重工業界第一線にある産業人のT氏が、このように自分の町の小さな歴史にも心を配ってくださっていたことに、あらためて、深く感銘した。

私の小文は、博物館の入館者増には役立たなかったが、そのかわり、黙って日本の文化と文化財をまもっている人々の姿を、はからずも私の前にクローズ・アップしてくれた。



◀ 清河八郎銅像（山形県立川町清川）

民衆医療の発達と蘭学塾

— 備中井原の村医者千原英舜の修学過程 —

柴田 一

近世後期における蘭学（洋学）普及の問題を、民衆医療の観点から考察する場合、地域住民と結びついた、非特権的な村医者の、蘭学修業の問題を無視することは出来ないであろう。

安永3年（1774）の『解体新書』刊行以後、蘭学が著しく発展したことは周知の事実であるが、直ちに村医者層にまで普及した訳ではない。一例を示す。備前和気郡北方村の眼科医武元登々庵は、名主の家に生まれ、文化2年（1805）、安芸二日市の医者、中井原沢との出会いを契機に蘭学を志し、「日東之翻書八千枚ノ作業」と、備前における「蘭学社中」の設立を決意した。同5年長崎に遊学したが、「幕府の権威か黄金の権威を借りぬ限り和蘭陀通詞から満足な指導は得られぬ」と語った原沢の予言通り、蘭学修業の困難さを具に体験し、意気消沈して蘭学修業を断念した。（拙著『近世豪農の学問と思想』参照）。

この事実は、村医者が蘭学修業を志す場合、名主層の子弟にしてなお、克服し難い障壁の存在したことを物語っている。然るに牛痘接種伝来の翌年、嘉永3年（1850）正月、足守藩主木下氏の要請により、緒方洪庵が「葵丘城除痘館」（足守除痘館）を設立すると、井原村の村医者千原英舜は、梁瀬村の山鳴弘斎、惣社村の潮田遠平、四十瀬村の藤田謙叔、西原村の守屋貞順など村医者達と共に、蘭方医として洪庵の種痘活動に参加している。（『謨斯篤種痘説』付録「葵丘城除痘館」名簿参照）嘉永年間には、蘭学は明らかに村医者層に普及しているのであるが、この村医者層への蘭学普及は如何にして実現したのか。その経緯を千原英舜の場合について検討してみよう。

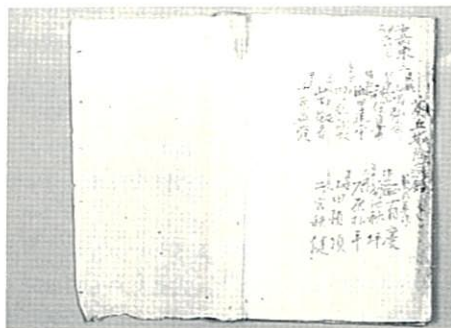
近世の村医者には、①安定した家産を有する「宿世ノ医」で、専門的知識を有する定住型の村医者と、②貧困で専門的知識の乏しい流浪型の村医者の2類型が存在したと思われる。英舜の祖父永峰永玄、父玄泰は、ともに専門的知識の乏しい「野夫医」であり、寛政9年（1797）山城国宇治郡能常村を追われて以後、諸国を流れ歩いた流浪型村医者であった。玄泰は一時長門国阿武郡洪木（紫福）村に寓居を構え、同村の中村家の入婿となり、寡婦於富と結婚した。その間に生まれたのが英舜である。粗暴な振舞いの多かった玄泰は、英舜誕生の文化10年（1813）中村家を追われた。英舜は生後3カ月にして家族とともに流浪の旅に出た。玄泰は途中父永玄と別れ、医を業としながら旅をつづけ、文政4年（1821）英舜が9歳のと

き備中後月郡高屋村に居を構えた。於富と弟信次郎は以後この地に定住したが、玄泰は同6年英舜を伴い再び諸国遍歴の旅に立ち、長門国大浦辺に寓居して後妻を娶った。晩年に至って後妻を離別し高屋村に戻り、英舜の養家がある井原村で死去したが、生涯極貧の流浪型村医者の境遇から脱却できなかった。

この家族崩壊・極貧の逆境に育った英舜が、名主の子登々庵さえ困難であった蘭学を修め、名医のはまれ高い、定住型村医者になり得た秘密は何であろうか。かれの修学過程を検討すると、①漢方医（古学者）の奴僕時代と、②蘭学者私塾の塾生時代とに区分することが出来る。

英舜の奴僕時代は、文政8年13歳から天保3年（1832）10歳までの8年間。その間、長門国大泊島伊佐市の平井玄道、安芸国豊田郡西市の高木賢寿、同郡舟木村の長谷川玄道など、医者の家を転々とし奴僕生活を送った。これは「野夫医」ながらも、医者である父玄道の感化で、逆境脱却の方法を医業に求めたためである。その間でもっとも有意義であったと回顧しているのは、長谷川玄道方の3年間であった。かれは玄道から素読を授けられ、1年にして四書五経、史記列伝を理解し、更に玄道の許可を得て隣村の市川玄伯塾の「論講会」に出席した。これは医書講読に必要な、漢学の基礎知識を修得したものと見える。また長谷川方では、「調薬」の仕事を通して若干の医療経験を積んだと思われる。かれは天保5年備中高屋村に帰り、極貧の母・弟を養うため、手習師匠の看板を掲げ、また翌年、井原村金蔵院快道の養子となり、快道の娘の於石と結婚したが、家計補助のため、医者看板を掲げている。前者は完全に失敗し、後者も医術拙劣のため不振ではあったが、看板を掲げる決心を支えたものは、奴僕時代の漢籍講読と医療経験であったと思われる。

かれの塾生時代は、天保11年（1840）28歳から同13年までと、弘化3年（1846）34歳から翌年まで通算わずか4年間である。それ以前、かれは一度京都・大坂方面への遊学を試みている。天保5年のことである。島原藩主松平氏の参勤の行列に従い、按摩で路銀を稼ぎながら西宮に向い、師事する医者を求めた。さらに大坂・京都・大和方面を歩いたが、「住来手形」を所持しなかったため



「請人」^{うけにん}が得られず、ついに目的を果さなかった。この遊学の決意を促したものは何であろうか。かれは長谷川玄道から、「世ニ豪傑ノ士宇田川、坪井信道、漢学者（漢方医）ノ姓名ヲ初テ聞キ得タリ。益々志ヲ起セリ」と記しているから、奴僕時代に、先学宇田川玄真・坪井信道や漢方医の大家の活躍ぶりを玄道から聞かされていたことであり、これが次の塾生時代への飛躍の起爆剤となったといえよう。

天保11年の暮に大阪に行き、今橋2丁目にあった藤田仲達の私塾斐然堂^{はいぜんどう}、瓦町にあった緒方洪庵の私塾適々斎塾に学んだ。洪庵は周知のように坪井信道に学び、天保9年に開塾し、多くの逸材を育てた蘭学者である。仲達も『柳井種痘日記』を遺した岩国藩医熊谷秋雨らが師仕した、著名な蘭方医であった。

この両塾での研修は、専ら翻訳書の筆写で、「原書ヲ読^{（ソトホッスレ）}トモ、両三年ノ日月ニ一家ヲ養ヒ読了スル能ハサルヲ計リ読サルナリ」とあるように、貧困な生活のため原書には最初から手をつけていない。夜は按摩療治で生活費を稼ぎ、昼は専ら筆写に従事した。『華岡青洲庵方集』に「天保十二年春二月斐然堂在塾中写之」の記載があり、『間歇熱經驗略説』には「天保十二年三月二日筆記、大阪今橋二丁目藤田仲達^{のち}在塾中ニ筆写」とある。「天保十一年庚子仲春千原蔵書」と記された『方函』も、藤田仲達の斐然堂で筆写したものであろう。

藤田・緒方の私塾にあること1年余。天保12年5月江戸に下り、両国薬研堀の佐藤泰然（1804～1872）の私塾に移った。泰然は長崎遊学の後、天保9年薬研堀に開塾したが、名医のはまれ高く、弘化元年（1844）には下総佐倉藩主堀田家の客分となり、私塾順天堂を開いた。英舜は当時を回顧して、「此時モ寝ズ書ナド研究ス」と猛勉強ぶりを語っているが、ここでも翻訳書の筆写が主であったらしく、箕作阮甫訳『外科必読』（6巻）の巻末に、「天保十三庚寅之秋、東都在塾中臨写之 千原英春普」と記している。天保11年脱稿の、林洞海訳『ワートル薬性論纂方』も、この時期に佐藤泰然の塾で筆写したものと思われる。

天保13年冬、英舜は養父老衰のため、在塾1年にして帰国したが、その間、泰然から再度にわたり、藩医の養子口を紹介されている。（既に妻子のある身、もちろん断っている）また帰国にあたっては、泰然が開業時に使った薬籠を贈られ、さらに界奉行に赴任する伊奈遠江守を紹介され、遠江守の母の特医に推挙された。泰然は、英舜の帰国の道中の無事と、収入の道まで配慮している。これほどまで、泰然が英舜の面倒を細くみたのはなぜであろうか。

泰然はいう。「此ク汝ニ周旋スルモ他ノ話ニアラズ。予ノ一臂ニナル者今二人ハ得タリ。一ハ林洞海、一ハ三

宅良齋^{こんさい}トス。今一人得タシ。汝モ粗目適アリ。今度帰省シ無難ニ養父母ヲ送り、妻子ヲ携ヘ再ビ東都ニ来ルベシ。道中飢エサエセネバ、江戸ニ来レバ、予周旋シテ難儀ハサセズ」と。英舜は当時既に、林洞海・三宅良齋につぐ高弟として、泰然に矚目されていたためである。

また、伊奈遠江守も、英舜を4カ月も堺に留めて厚遇し、帰国にあたっては、「挙家堺浦ニ来ルベシ。予東ニ帰ルトキ携帰り世話シテヤル」と、江戸開業のことを勧めている。この佐藤泰然・伊奈遠江守の熱心な勧誘・愛顧からみて、大坂・江戸遊学中に、翻訳書の筆写を通して修めた医学・医療技術は相当高度なものであったと考えられる。果して天保14年4月、井原村に開業すると、近郷の「宿世ノ医」も礼を厚うして来訪し、患者も江戸・大坂仕込みの名医の名前を聞き伝え、診療を乞うものが多く大いに繁盛した。

かれは弘化3年（1846）34歳で再度遊学したが、佐藤泰然のもとへ長男貫一を入塾させ、自らは京都の宮原健蔵に詩文を学び、ついで大坂に移り、洪庵の塾で「西洋文典」（原書）に挑戦「カラマチカ」「セミタキス」を読んだ。しかし「期過テ学事、記スルトモ好ク忘ル。是妻子ト経済ニ志奪ハル」とあるように、家族・家計に心を砕き、原書を自由に読解するには至らなかった。その後も翻訳書の筆写につとめたらしく、嘉永3年（1850）足守除痘館の種痘に参加したときも、『謾斯篤種牛痘説』『蒲烈泄児種牛痘篇』（織田貴斎訳）を、その宿舍で筆写している。これからみて優れた蘭書の翻訳書が作られたことが、原書を解読できない英舜でさえ、すぐれた蘭方医になることができたひとつの理由である。

弘化4年（1847）6月、かれは大坂備後町東堀に寓居を構えて開業をした。江戸開業を勧めた佐藤泰然・伊奈遠江守、京都開業を勧めた宮原健蔵の意見にかれが敢て従わなかった理由は、「予ハ東都ノ驕者、京師ノ倭柔ヲ好マズ。故ニ京・江戸ニ任スル心ナシ」と記すところから明らかである。しかし大坂開業も、永任の意志によるものではなく、「予浪華ノ土風ヲ好ミ十年辛苦セバ一経済ハ出来ルベシ、然ル^{のち}后井原ニ帰リ安ク家政ヲ為ント欲」したからである。かれの目的は井原村の定住型村医者になることであり、大坂開業は、開業資金蓄積の手段に過ぎなかった。ところが同年、大坂の寓居で盗賊の難に遭った。それを契機に帰郷し、弘化4年（1847）から井原村の村医者となった。長男貫一も、慶応2年（1866）佐藤泰然のもとから帰郷し、父子共に名医のはまれ高く、地域医療に貢献した。英舜は明治23年（1890）6月30日78歳で他界し、妻於石も翌年9月24日英舜の後を追った。

結論。幕末には千原英舜のように、蘭方医学を修めた優れた村医者層が形成され、民衆待望の牛痘接種、その他近代的医療が普及しはじめる。この新しい村医者層の

形成を可能にした客観的条件は、①藩医を中心とする蘭学者の手で、多くの翻訳書が作られたこと、②文政7年(1824)シーボルト鳴滝塾、天保9年佐藤泰然塾、同年緒方洪庵適々斎塾など、多くの私塾が開設されたことであ

る。そこに、蘭学(洋学)の地方的発展(民衆医療の発展)過程における、文政・天保期の画期的意義が認められる。参考資料;千原英舜の自伝稿『六箱』(写)その他。(1981. 3. 1)

テーマ展

備中刀工・国重派

(S 55.12.24 ~ 56.3.10)

もともと、備中には青江刀工のように平安~室町初期にかけて、優れた刀工集団があった。戦国時代に入って、河野通信の後裔を名乗る備後三原辰房派の流れを受けたものが、あるいは青江の末流であるのか、備中一円に急に勢力をもってきた刀工集団がある。それが国重派である。

主な鍛刀地は井原、彦原や砦部、水田(北房町)、それに松山(高梁市)などである。そこから全国に移住し、幕末に至るまで刀工数は四十余名を数えている。

最初の頃は、実用を主とした末備前、末三原風のものであったが、相州伝を学んだ大与五国重が出たのを境に作風が一変し、そこから幕末に至るまで代々、沸の悪い、覇気のある相州伝を忠実に受け継いでいると言えよう。ただ我が国でたった一人しかいない女刀工である「お源」の刀剣には師、筑州信国派の刀匠の影響や女性特有のやさしい作風が表われ、国重派の中でもやや趣を異にしている。

(学芸員——白井洋輔)



女国重鍛刀の図

(読解の便を考え、句読点を施した。——白井)

三好亭子教誨書

備の中州、東江原平井の里、女鍛治国重名は源、歳十六にして父伴十郎におくれ、伯父伴十郎に養へ。廿一成るとし、伴十郎病重くまきに終らむとするに望て源にいうやうは、そもも我國重の家は、昔此のさと高越の城主北条家に仕へしより今に十五代、相伝て絶へず。我身に及んで家伝絶なば、先租にこれを何とかいはいむ、いかばかり口惜からざるや。汝女たりといえども精神を尽くしなばならざる事あるまじ。源此の言葉に感じ、何ともして業をつかばやとて、秘めたる法をつと授りぬ。是より遺命を重んじ、いかにとも日夜はげみけれども、なかくすなをに、てに入りぬべき事にしもあらず。ましてや女のたなれぬ業なれば、力のおよびがたきを悔ひ、氏の神なる天満宮に深く祈誓をこめ、日々に詣ではこびしかば、其の感応にや、百ヶ日ばかり満するあした、問ひ来る人有り。筑前の国来信国といへるが、此業の修業すとてめぐりつるにてありける。信国も、女の手していとむ事のいぶかしげに尋ねれば、こまやかに此の由を答え、作れる刀を出して見せしに、信国つくづく見、大いに感賞し、なお及ばざる所を補ふべしとて、ねんごろにおしえ授ける。是よりしてぞ上作を造り出し、女国重とて名も遠く聞へける。文化五年の水無月の末と申すに、みまかりぬ。生れし享保十八年丑年をさりて齡七十六。此の像は、則養われたる伴七が、母のかたみを残さばやとて、かねて信喬といいつる画師にうつしおかしめしなり。

・・・・・・・・・・・・・・ 出 品 目 録 ・・・・・・・・・・・・・・

1.	小太刀	銘 備州辰房国重作 大永七年八月日	室町時代	26.	職人尽絵 (複製) 郷土鐻		
2.	刀	銘 備中砦部住大月又三郎 国重作 大正三年二月吉日	桃山時代	27.	水田源国重	1点	江戸時代
3.	脇差	銘 備中国砦部庄住左兵衛 入道国重作 大正十二年八月吉日	"	28.	金光堂守親	1 "	"
4.	短刀	銘 備州住井原拾助国重於 小鳥作 大正十二年八月日	"	29.	長船刀匠祐直	1 "	"
5.	"	銘 備中井原住国重作 天正十三年八月日	"	30.	備州岡山住風竹堂眠雀	1 "	"
6.	刀	銘 備中国井原住佐藤拾助 国重作 天正十四年二月吉日	"	31.	備庭住東雲齋	1 "	"
7.	"	銘 備中水田住大与五国重 作	"	32.	長船住長次	1 "	"
8.	"	銘 備中国水田住大月市蔵 国重作	"	33.	備前岡山保高	1 "	"
9.	脇差	銘 山城大掾源国重	"	34.	竹林軒守行	1 "	"
10.	"	銘 "	"	35.	備前草谷盛行	1 "	"
11.	槍	銘 水田住国重	江戸時代	36.	安原美乘	4 "	"
12.	"	銘 備中国荏原之住大月作 右衛門尉国重作	"	37.	備州之住長公	1 "	"
13.	刀	銘 越前大源国定延寶 三年乙卯八月吉日	"	38.	備前岡山住長尾嘉一	1 "	"
14.	"	銘 備中国住大月安左衛門 尉国重	"	39.	正渡雪山	5 "	"
15.	"	銘 備中国砦部住為家	"	40.	東備岡知昆	1 "	"
16.	脇差	銘 大月安左衛門尉国光	"	41.	備岡山知叔	3 "	"
17.	"	銘 備中荏原住国重	"	42.	如石	1 "	"
18.	短刀	銘 備中荏原国重 天明二 二月 大月女源	"	43.	岡山住関次	2 "	"
19.	"	銘 備中国荏原住国重 天明三 二月 大月女源	"	44.	飛龍齋	1 "	"
20.	"	銘 荏原住国重 二月日	"	45.	備前住石関	1 "	"
21.	脇差	銘 備中荏原住国重作 二月二日	"	46.	中川勝継	5 "	"
22.	女国重鍛刀の図		"	47.	中川勝正	1 "	"
23.	大月家系図 (大月家文書)		"	48.	中川一勝	1 "	"
24.	鍛刀心得 (")		"	49.	中川勝實	1 "	"
25.	職人尽絵 (複製)		"	50.	備前与四郎	1 "	"
				51.	備前国岡山住駿河	4 "	"
				52.	備前正阿弥	1 "	"
				53.	正阿弥勝義	3 "	"
				54.	中川一の	3 "	"
				55.	備州住長次	1 "	"
				56.	備中国松山住宗信	1 "	"
				57.	三郎太夫	1 "	"
				58.	備前住又七	1 "	"
				59.	正阿弥宗信	1 "	"
				60.	備前住天法	1 "	"
				61.	備前三郎太輔	1 "	"
				62.	中川一勝	1 "	"
				63.	作州住人勝久	1 "	"
				64.	正渡雪江	1 "	"
				65.	東備住安寿	1 "	"
				66.	備州岡山住峯住	1 "	"
				67.	備州士共常	1 "	"

一 岡山県の歴史と美 一

井原市市民会館 9.13(土)～16(火)

落合町中央公民館 11.22(土)～25(火)

本館では、普及活動の一つとして、日頃、博物館においてになる機会の少ない県民の皆さんに館蔵資料を鑑賞していただくため、昭和50年から、巡回展を実施してきた。本年度は、昨年の神郷町・西粟倉村にひき続いて井原市市民会館、落合町中央公民館で開催したが、地元教育委員会の熱心なご協力をいただいて盛況であった。展示品は館蔵品の中から、会場の条件に応じ、またその地域との関わりを考慮しながら精選した。展示品は次のとおりである。

■ 井原出品目録

- ① ナウマン象化石 約40万年～1万5千年前
- ② 袈裟褌文銅鐸 弥生時代
- ③ 円筒埴生 古墳時代
- ④ 水の子岩海底出土備前焼 室町時代
- ⑤ 備前焼大皿 桃山時代
- ⑥ 太刀銘幸景 (県指定重要文化財) 室町時代
- ⑦ 紫糸威腹巻 //
- ⑧ 方形銅板線刻 蔵王権現・釈迦如来鏡像 平安時代
- ⑨ 木造彩色 菊牡丹透華鬘 南北朝時代
- ⑩ 花鳥時絵螺鈿小簞笥 江戸時代初期
- ⑪ 紙本淡彩 図像抄 鎌倉時代
- ⑫ 毛利出羽与(組)帳 慶長7年(1602)
- ⑬ 御新座衆御改之帳(森出羽組) 慶長7年(1602)
- ⑭ 武元登々庵あて菅茶山の手紙 江戸時代後期
- ⑮ 備中名勝考 文化12年(1815)
- ⑯ 盤香具 江戸時代後期
- ⑰ 正阿弥勝義金工品 明治時代

■ 落合出品目録

- ① 円筒埴輪 古墳時代
- ② 石枕 (県指定重要文化財) 古墳時代(4世紀)
- ③ ナウマン象化石 約40万年～1万5千年前
- ④ 東大寺瓦 鎌倉時代
- ⑤ 備前焼緋襷大皿 桃山時代
- ⑥ 太刀銘幸景 (県指定重要文化財) 室町時代
- ⑦ 紫糸威腹巻 //
- ⑧ 木造彩色 菊牡丹透華鬘 //
- ⑨ 花鳥時絵螺鈿小簞笥 江戸時代初期
- ⑩ 毛利出羽与(組)帳 慶長7年(1602)
- ⑪ 御新座衆御改之帳(森出羽組) 慶長7年(1602)

- ⑫ 法然上人伝法絵断簡 鎌倉時代末期
- ⑬ 寂室元光墨蹟 南北調時代
- ⑭ 十三仏図 (県指定重要文化財) 室町時代
- ⑮ 小早川隆景誓紙 戦国時代
- ⑯ 宇田川槐園肖像 江戸時代中期
- ⑰ 良寛書幅 //
- ⑱ 文人諸家貼交屏風 //
- ⑲ 妓女図 //
- ⑳ 熊野染夜着 //
- ㉑ 舎密開宗 //
- ㉒ 坤輿図 //
- ㉓ 岸田吟香売薬錦絵引札 明治時代後期

■ 入場者数

井原	652
落合	520

昭和55年度受贈資料

*文書

戸川肥後書状(写) 1通 早島町 佐藤 迪彦氏

*民俗

かしき網漁資料 35点 玉野市 鴨生 金一氏
 かしき網 12点 明石市 門前登美代氏
 ひな人形ほか 44点 岡山市 難波千代子氏

*陶磁器

備前焼小瓶 2点 瀬戸町* 藤原 勝彦氏

以上の皆様から、上記の貴重な資料の寄贈をうけました。永久に保存し、本館の展示内容の充実に活用させて頂きたく存じます。ここに御寄贈下さいました皆様の御芳名を記し、厚く御礼申しあげます。

岡山県立博物館だより

No. 16

発行日 昭和56年3月31日

発行者 岡山県立博物館

館長 富岡 敬之

岡山市後楽園1-5

☎(岡山) 72-1149